
忘れな草の王冠

井口いつき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

忘れな草の王冠

【Nコード】

N9815D

【作者名】

井口いつき

【あらすじ】

「養子だと知った日から、レティシアのために生きようと決めた。自分の存在価値に苦しむエリーは、ある時破天荒な少年アベルに出会う。二人の出会いには、偶然か必然か。エリーの秘密も絡み合い、正反対な二人は、大きな運命の波に飲み込まれていく。不器用な少女の自分探しの物語

序章

『どうして、エド。なぜ、このようなことを。』

静まり返った暗闇の中で、荒い呼吸の音だけが、聞こえた。

その肌と同じ純白のドレスを身にまとった女は、紅く染まった腹部を押さえて、細い体を折るようにして、床に倒れていた。

『……。姉様が、いけないんじゃないか。なぜ、僕じゃなく、クリットを選んだ？子供は、どこにやったんだ？』

窓辺に佇む黒い人影の顔は、女には、暗闇の中ではよく見えない。

しかし、耳慣れたそのハスキーな声は、彼女にその人影が、エドであることを告げていた。

エドの声は、少し震えていて、悲しげであった。

『……………』

女は、答えない。

唇をギュツと結んで、エドが立っている方を睨みつけた。

『答える！』

エドは、声を荒げて傍にあった椅子を足で蹴飛ばした。

『子供？何のことかしら？』

『ふざけるな！クリットとお前の子だ。どこに隠した？』

エドは、倒れている女ににじり寄った。

『知らないわ。』

『このっ！』

なおも白を切ろうとする女にエドは、手を上げようとした。

その時、ドアがノックされる音がした。

『パドマです。ただ今、東門の門番から大きなかごを下げた女官を三日前に通したとの情報が、入りました。』

女の息をのむ音が、聞こえた。

『よくやった。その女でほぼ、間違いはないだろう。』

エドは、にやりと笑うと、ドアを開ける前にもう一度、女を見下ろした。

女の呼吸は細く、もう彼女の命が、長くないことを示していた。

『姉様のような方にこの国は、任せておけません。この国は、僕が頂く。子供もどこに逃げようと必ずこの手に捕まえて始末します。』

そう言うと、エドはドアを閉めて出て行った。

残された女は、薄れていく意識の中、愛しいわが子の顔を何度も思い浮かべた。

『エレナ。私の愛しい子。どうか生きて幸せになって。』

白い頬に一筋に涙が流れ、女は息を引き取った。

第一章：不思議な旅人1

かつては四季折々の花々であふれていた町の花壇にはもう花は一本も見当たらず、異国の珍しい品々が所狭しと並んでいた市場には二、三軒の小麦粉としおれた野菜だけが置いてある小さな店が残されているだけであった。

人気の無い路地を一人の旅人が歩いていった。

旅人といっても、まだ15才くらいの少年である。

腰に差した見事な長剣とは不釣り合いな小柄で細身な体型。

どのくらい切っていないのか、伸び放題の黒い髪は無造作に後ろでまとめられ、シャツからちぎったようなぼろきれで結ばれていた。

一応マントは着ているもの穴や裂け目で、およそマントとはいえない代物であった。

瞳にはかすかな失望が浮かび、乾いた唇はきつく結ばれていた。

アベルは困惑していた。

以前この国から来た商人はこのラディーン王国の首都ペストニアはその名の通り真珠のように美しさだと言っていた。

西ではこのようなところを真珠というのか？

城とその周りを囲む貴族のお屋敷街は確かにきらびやかであるが、

平民の住む城下町はこの有様である。

先王であるアイリス殿下の病死後、王位を継いだ弟君の悪政は聞いていたが、まさかこれほどとは思っていなかった。

いったいこの国の王はなにを考えているんだ。

「一国の主といっても色々いるんだな。」

少年はそうつぶやくと小さくため息をついた。



「そんなに怖い顔しないで、エリック。今日は年に一度の花祭りの日よ。私だって十七の女の子よ、花の冠を交換した相手と時の石舞台の上でダンスを踊りたい。夕食には絶対帰ってくるから。ねえ、いいでしょ。エリー。」

レティシアは胸の前で手を組み、彼女の前に仁王立ちしてる人物を、自慢の空色の瞳で見つめた。

腰まである赤味がかった陽気な金髪が、窓から差し込んだ朝の陽光に反射してキラキラ光っている。

「エリーって呼ぶなって言ってるだろう。だいたいあのジョンってやつはレティシアにふさわしくないとと思うね。あんな、頭が悪そうで気も弱そうなやつ、僕は絶対に認めないよ。だいたい、レティシア。君は自分がドルトン公爵家の跡継ぎであるという自覚が足りないように思うね。君は将来この広大なビエナス地方を引き継ぐ。それだけに君を狙う者はたくさんいるんだ。軽率な行動は慎むべきだよ。」

眉をひそめて少年は答えた。

美しい少年である。

すらりとした体格に整った顔立ちは凜とした気品を感じる。

そして何よりも、その滑らかな純白の肌は、見る者を釘付けにした。たとえ、エリックが強い日差しに何時間晒されようとも、その白さは変わらないから不思議であった。

その容姿ゆえに冷たい印象を受ける者も少なくなかったが、それと同じくらい多くの者が少年に惹きつけられているのも、また事実であった。

小柄で華奢な体型は少女を思わせ、短く切られた茶色の髪だけが、かろつじて彼を少年に見せていた。

彼はドルトン夫妻の実の子供ではないので、派手で情熱的な顔立ちのレティシアとはあまり似ていない。

赤ん坊の時に町の教会に捨てられていたのをマダムドルトンが拾い、

養子として育てた。

「お父様と同じようなこと言わないでよ。もう、何言われたって行くんだから。エリックだってもう今年で十五なのだし、一緒に行く女の子いないのかしら。女の子たちが噂してたけど、ここいらで一番かつこいい人ってエリック・ドルトンですって。」

そう言うときレティシアはくすくす笑った。

エリックは黙って聞いていたが、少しして口を開いた。

「ああ、そうだ。公爵様と聞いて思い出したけど、昨晚、このことを公爵様に申し上げたら、どうしても行くというなら僕を連れていくか、公爵の近衛隊の中から10人お供につけるか選べっておっしゃってたよ。」

涼しい顔をして言ったが、瞳は明らかに笑っている。

「ひどい、お父様に言ったの？デートにお供10人も連れて行くなんて、町でいい笑い者になるわ。まったく、告げ口なんて、ルール違反よ。」

レティシアは声を荒げて、こぶしで軽くエリックの肩をなぐった。

「別にふたりの横を歩くななんて言わないよ。ふたりが気にならないように後ろからそっとついていだけだから。何事もなければ、君の前には出ないよ。」

言い終わるとエリックは、踵を返して去っていった。

「何がそつとよ。」

何にも分かってないんだから。

少年の姿が見えなくと、レティシアは、ため息をついた。

▲

ビエナス地方では花祭りの日の昼食のデザートは糖蜜のプディングと決まっている。

花祭りの日には森の妖精達が集まり花の蜜をかけたプディングを食べるといわれていることから由来するらしい。

ドルトン公爵家でも例に漏らさず、料理長のピートが腕を振るった極甘プディングが出された。

「おかわりはいかがですか、エリック様。」

給仕係のマーサが優しくたずねた。

「うん、もらつよ。」

「まだ、食べるの？よく食べれるわねえ、こんなに甘いもの。」

レティシアはおかわりのプディングを幸せそうに食べるエリックをあきれたように眺めた。

「レティシア、失礼なこと言わないの。ピートに失礼でしょう。」

「そーゆうお母様だつて半分も残してるじゃない。お父様なんて、ほら、一口しか召し上がってないわ。」

「まあ、これからゆっくりいただくところですよ。」

マダムドルトンは顔を赤らめ、慌ててプディングを口に運んだ。

「おほん。」

ドルトン公爵もきまり悪そうに咳払いした。

「皆さん、プディングがお嫌いなのですか？こんなにおいしいのに、僕、いくらでも食べられますよ。」

おかわりのプディングを食べ終えてたエリックが不思議そうな目でドルトン家の公爵親子三人を見つめて言った。

そばで一部始終を見ていた給仕係のマーサはこらえきれず吹き出してしまった。

▲

「お嬢さんは暗くならないうちにお届けします。」

図書館長の息子、ジョン・ブラウンは初めて入る公爵家やマダムドルトンに緊張しているようすであった。

先週起きた鶏泥棒についてマダムに三十分近く熱弁をふるった後、出された紅茶をひっくり返した。

「じゃあ、行ってくるわね。」

春用の薄手のマントを羽織ったレティシアはジョンブラウンの腕に手をかけると、最後にもう一度エリックを見やった。

エリックの方はレティシアを見ようとせず、すまして紅茶を飲んでいた。

レティシアはいつまでも子供な弟を思い、心の中でため息をつく、マダムドルトンに声をかけた。

「それじゃあ、僕も行ってきます。」

初々しいカップルが出かけて、五分ほど経ち、エリックは短剣を手にとった。

マダムドルトンはカップを置くとエリックを見て、ため息をついた。

「あなたはいつたいいつになったら、普通の格好をしてくれるのか

しら。」

「え、どこか変な所がありますか？」

エリックは立ち止まり、きよろきよると自分の全身を見回した。

「そのような意味ではありません。わかっているのでしょうか？」

「いいえ、何のことでしょう。」

「まったく。強情っぱりですね。」

何も言わず、軽く頭を下げた少年の端正な顔には、何の感情も見当たらなかった。

第一章：不思議な旅人2

ジョン・ブラウンはデートの相手としてはなかなか優秀な方だった。図書館長の息子だけあって、読書好きのレティシアの話し相手として十分な位には読書のたしなみはあったし、なにより紳士的な態度を崩さなかった。

結局、二人の後をついてきたエリックの出番も無く、花祭りのメイン会場である「時の石舞台」に到着した。

陽気な音楽があふれ、石舞台の中心にある円形にぽっかりと空いたスペースの中で、花の冠をつけた男女が手を取り合って幸せそうにダンスを踊っている。

ジョンとレティシアも屋台に飾られた色とりどりの花の冠のなかから相手に似合うものを買って求め、交換した。

夕方になると石舞台はますますにぎやかになり、ビールやレモネードがふるまわれた。

屋台の横には、小さなテーブルの上には、大皿に盛られたポテトや大きな炙り《あぶり》ソーセージが置かれており、踊り疲れた若者達は、ビールを飲みながらそれらを食することもできた。

村の年寄りや孫や子供達のダンスを岩に腰を下ろして見物したり、気の合う仲間との談笑を楽しんでいた。

少年はつまらなそうにレモネードのビンを口につけた。異性とダン

スを踊ることのどこが楽しいのだろう。

エリックは頬を赤らめて踊る少女達を眺めながら、マダムドルトンに言われたことを思い出していた。

自分は養子だと知った日からレティシアを一生守っていくことでドルトン家に恩返しをしようと決めた。

決しておかしくはない。エリックは腰に差した短剣の柄を指でなぞった。

プラチナで装飾された柄はひんやりとしていて触れていると心が落ち着く。

ドルトン家にすべてを与えられたエリックにとって唯一自分のものだといえるのは、拾われたときに持っていたと言われているこの短剣だけだ。

自分がいったい何者なのかということを知るのはとうの昔にあきらめたが、存在価値だけは見失いたくないかった。

レティシアを守ることは、エリック自身を守ることでもあった。

そうだ、レティシア。ぼんやりしていたエリックは、はっとして顔を上げ、クルクルと回る花たちの中にレティシアの姿を探した。



『あのお客様。代金の方は銅貨3枚の先払いになりますが、よろしいでしょうか?』

宿屋の主人は、旅人を上から下まで見てからためらいがちに口を開いた。

『ああ、今出す。』

そう言うと、アベルはベストのポケットを探り、銅貨を3枚取り出した。

『ありがとうございます。』

主人はほっとしたように代金を受け取った。

『しかし、一々これでは大変だな、ご主人。払わない者もいるのか?』

『はい。でも、この国で宿屋や居酒屋を営んでいれば、盗賊や野伏からの被害を受けない者はありませんからね。』

『荒れているのだな。』

アベルは、首都の有様を思い浮かべながら、呟いた。

『先代の女王アイリス殿下が、亡くなるまでは本当に良い国でしたよ。まあ、ここなんかまだ良い方です。他では、食べていくのも精一杯と聞きますからね。うちは領主様が、ドルトン夫妻様ですからね。公爵様は私達平民に対してもとても親切な方ですし、公爵夫人は聡明で決断力のあるお方ですからね。』

『夫人が統治に口出しを？』

アベルは不思議そうに尋ねた。

『お客さん、あんたはやっぱり異国からの旅人さんですね。この国では、女性が統治権を持つのは、珍しいことじゃありませんよ。むしろ、奨励されているんです。王家でも女王制が採用されているから、男性の王なんてめったなことじゃ誕生しませんね。実際、今もエドモンド様が王に即位された結果がこの始末ですからねえ。』

主人は声をひそめた。

代金をもらい安心したのか、やけに饒舌になっている。

『おっと、そうだ。お客さん、今日は一年に一回の花祭りの日なんですよ。なかなか風情がありますから時間があったら、あとで町の東の方にある石舞台に行ってみてください。』

そう言って、主人はにこにこしながらアベルに部屋の鍵を手渡した。



夕日が木の陰から差込み、レティシアの頬にかかった。

森は、動物達が迫り来る夜の静けさから逃げるように木の洞の我が家へと急ぐざわめきに溢れていた。

「楽しい日でしたわ、ジョン。ダンスお上手ね。」

「君こそかすみ草の冠がとても似合っていてとてもすてきだったよ。」

ふふ、いい感じね。

エリックはどこにいるのかしら？

レティシアはこっそり後ろを振り返った。

しかし、後ろに見たのは静まり返った木々が立っているだけで、あをつけているはずのエリックの気配はどこにもなかった。

気を利かせたのかしら。レティシアは、不思議に思いながらも心をときめかせた。

「ねえ、ジョン。今日は遠回りしてバリントンの星見橋を渡ってい

きましようよ。時間は心配しないでいいわ。実はお母様にはこっそり遅くなるかもって言ってるの。」

レティシアの甘い声が夜風に乗った。

「そいつは都合がいい。」

暗くなってきた森の中から神経質そうなジョンの高い声のかわりに低く太い声が返事をした。

驚いたレティシアが振り向くと、そこには喉にナイフを突きつけられて青い顔をした哀れなジョンと柄の悪そうな男が六人ほどジョンを囲んで立っていた。

「お前が公爵の娘だろう？おとなしく俺たちについてくれば、こいつは放してやる。」

アベルは悩んでいた。

同時に自分の間の悪さを呪いたい気分だった。

ちよつと寄った町で花祭りをやっていると聞いてちよつと覗いて、ちよつとビールを飲んで、ちよつと森に迷い込んだ結果がこれだ。

あのジョンとかいう男は頼りにならなそうだし、となると6対1は少しきつい。

アベルは男たちとにらみ合っている少女を見た。はつきり言って全然動じているように見えない。

もう少し様子をみるか。

アベルは地面に腰を下ろした。

レティシアがため息をついて、口を開きかけたそのとき、ジョンにナイフを突きつけていた男が叫び声を上げた。

男の手には小型のナイフが深々と刺さっていた。

「まったく、だから僕は反対したんだよ。そんな腰抜けがレティシアの相手だなんて。」

茂みからレティシアのよく知る白い影が浮かび上がった。

走って来たらしく息が上がっている。

「エリック、なんで来たの！危ないから出てきちゃだめよ。」

先ほどの落ち着いた態度はどこへやら、レティシアはあわてて叫んだ。

レティシアのあわて様に少年は少しむっとした顔をした。

「てめー何しやる！」

男達もいきり立ち、レティシアに手を伸ばした。

「

レティシア、逃げて！」

エリックが叫んだと同時に黒い影が木の上から飛び出してレティシ

アをつかもうとした男を切りつけた。

突然現れた黒髪の少年は、踊るように長剣を振るう。

薄暗がりの中で、長剣が、鈍く光る。

レティシアと恐怖で固まってしまっているジョンを少し離れた茂みの陰に避難させたエリックは、腰の短剣を抜いた。

「やめて、エリック。あぶないわ。」

レティシアの制止の声を振り切ると、エリックは嬉々として盗賊たち向かっていった。

決着がつくには五分とかからなかった。

黒髪の少年の踊るような剣術とエリックの無駄のないしなやかな戦いぶりを前にして、盗賊たちも分が悪いと分かると早々と引き上げていった。

「レティシア、追ったほうがいいかな？」

一段落すると、エリックはレティシアのいる茂みを振り返って言った。

「いいわ、別に。ただのゴロツキみたいだし、捕まえてもしようがないわ。ところで、助太刀をしてくださったあなたは旅のお方？」

月の光の前に目立っていた長剣を鞘に収め、闇の中にひっそりたえずんでいる少年にレティシアは尋ねた。

大陸の西方ではあまり見られないエメラルドグリーンの瞳が闇の中で猫のように妖しく光っていた。

「ああ。」

少年は手を伸ばすと近く木から葉を一枚取り長剣に付いた血をふき取った。

「では旅のお方。今晚泊まるところがまだ決まっていないようでしたら、わたくしどもの屋敷にいらっしゃいませんか。助けていただいたお礼もしたいですし。」

レティシアは不思議な少年に興味を持った。

言葉に耳慣れないアクセントがついている。

東方の人かしら？

年も私達とそう変わらなそうだし。

「いいよ、礼なんて。あんたも最初は全然動じてなかったから、俺もそのちびが来るまでは助ける気はなかったしさ。」

少年はエリックをちらりと見た。

「お前だつてちびじゃないか！」

気がつくともエリックは少年に怒鳴っていた。

「やめなさい、エリック。・・・でも、結果的には助けていただいたのだし、まだ町にいるようでしたら、困ったときにはいつでもドルトン家までいらして下さい。ああ、申し遅れました、わたくしはレティシア・ドルトンと申します。この子は弟のエリックです。よろしかったら、お名前を教えてくださいませんか？」

「俺はアベル。悪いんだけど、町までの道を教えてくれないか？」

少し照れたように微笑んだ少年の齒は、月の光に照らされて、白く光っていた。

第一章：不思議な旅人3

「あら、おかえりなさい。花祭りは楽しみました？」

マダムドルトンは食後の紅茶を飲むのを止めて顔を上げた。

「遅くなってすみません、マダムドルトン。」

「いいわ、エリック。ジョンが挨拶にきてないところをみれば、だいたい察しがつきます。ご苦労様。」

「反省すべきはあなたよ、レティシア。ジョン・ブラウンも気の毒に。」

「お母様ったらまさかこうなるのを分かってて・・・。」

「お父様にはわたくしからお話しておきます。エリックは残って、一応詳しく話して頂戴。終わったら、マーサに言って夕食を用意してもらいなさい。レティシアは夕食抜きです。いいことエリック、間違ってもレティシアの部屋に夕食を運ばないように。甘やかしてはダメよ。それからふたりとも、明日お父様から大事なお話があるから朝食前にお父様のお部屋に行きなさい。」

ベットでふてくされるのに飽きたレティシアが不満を日記に書き綴っていると、ドアをノックする音が聞こえた。

「レティシア、夕飯持ってきたから食べなよ。」

エリックがお盆を持って入ってきた。

「あら、お母様の手下が私に何の用かしら？」

機嫌の悪いレティシアの態度はあくまでも冷ややかである。

「そんな言い方しなくてもいいじゃないか。レティシアこそ今日危ないから出てくるななんていって、僕を子供扱いしたじゃないか。あいつにだってチビ呼ばわりされるし、僕は怒ってるんだよ！」

レティシアは黙って聞いていたが、やがて立ち上がるとエリックの髪の毛をぐいっと引っ張った。

その途端、茶色の髪の毛は横に大きくずれると床に落ちた。

代わりに小麦色の豊かな髪がエリックの肩に流れ落ちた。

「なにが、子供扱いよ！自分の妹が剣を握って戦うなんて私じゃなくたって、止めるわ。それにあなたが小さいのは当たり前じゃない、あなたは女の子なのよ。エリー。」

「何するんだよ！それに僕はエリックだって、何度言わせるんだ。」

長い睫毛に縁取られた藍色の瞳は大きく開かれ、腰まである小麦色の髪は少女が動くたび、サラサラと揺れ、白い頬は怒りでピンク色に染まっている。

もうどこから見ても少女にしか見えないのに、エリーはなおも似つかわしい乱暴な言葉遣いをした。

「私より愛らしい容姿を持っていてよく言うわよ。私に言わせれば、あなたの方が心配よ。あなたは気づいてなかったみたいけど、あなたがあんまりにも可愛らしい顔立ちをしているから

町の男の子の中では女じゃないかって疑ってる人もいるのよ。たとえば、ジョン・ブラウンとかね。」

「なにを言ってるんだよ。そんな訳ないよ。」

エリーは驚いて叫んだ。

「本当のことよ。今日だってあいつの視線をあなたからそらすために私から誘ったのよ。まあ私だって乙女だし、ちよつとは浮かれていたけどね。結局、やり方は変わったけど、最初の目的は達成できてよかったと思ってるわ。ジョンは勇ましく剣を振るうあなたを見ているし、もう女の子だなんて思わないでしょうね。」

「そんな・・・」

「エリー。あなたは単純なくらい素直だから、気づいてないようだけど、剣を振り回す以外にも人を守る方法はいくらでもあるのよ。」

事実を知ったエリーは顔を赤らめた。

お盆をレティシアの前に荒々しく置くと、小麦色の髪を振り乱しながら、ドアを勢いよく閉めて出て行った。

少女が出て行った後、残されたレティシア・ドルトンはため息をついた。

呆れているのは、単純な「妹」に対してなのか、それとも姉としてどこか威厳に欠ける自分に対してなのかは、よく分からなかったが。

第二章：影の都 1

トーマス・ペン・ドルトン公爵はラディーン王国でも一、二を争う領地を持つドルトン家の四代目を務める領主である。

面倒なことが苦手な彼は王宮には年末に一度あいさつをしに行くだけで貴族の社交界も妻エミリア・ドルトンに任せっぱなしなっており、彼自身は専ら庭の畑で土いじりをしている。

事実、この広大なビエナス地方は妻のエミリアつまりマダムドルトンに治められていると言っても過言ではない。

妻の意見が彼の意見であることは周知の事実であり、彼自身もマダムドルトンなしではやっていけないことを認めている。

気の強い妻に花を持たせるこの方法は良好な夫婦関係の継続にもつながっている。

昨日の晩も長女のレティシアと、どういう理由か男装している養女のエリーを首都にある全寮制のフェローラ学院へ行かせたいと言われたときも、若い娘達の不在は寂しく思われたものの、いつものように一言こう言うしかなかった。

「ああ、お前の好きにするといい。」と。

妻の意見を公爵の決定として子供達に伝えるのは、もちろんドルトン公爵自身の役目である。

公爵の威厳を保たせるためにマダムが考えた制度であるが、割と効果があったりする。

やはり一家の主として向き合つと、娘のレティシアの態度も緊張を含む真剣なものになるようだ。

もつともエリーは常に淑やかで奥ゆかしい態度だが。

まあ、事実上、マダムが言いにくい決定を公爵に言わせる制度といつてもよいだろう。

さて、二人の娘、一人は息子にも見えるが、とりあえず娘が二人、ドルトン公爵の前に立っている。

公爵は重い口を開いた。

「昨日の一件を聞かせてもらった。この町で若いお前たちが自由に暮らしていくが、難しいということがよく分かった。そこで、エミリアと話し合った結果、首都ペストニアにあるフェローラ学院に行かせることに決めた。それから、エリー。君は女性徒として入学させるつもりだ。」

言い終わると公爵は長いため息をつき、娘達の反応をうかがった。

娘達の反応は正反対なものだった。

レティシアは首都ペストニアへの期待に目を輝かせていた。

しかし、エリーは表情には出さないよう努めているようであったが、

にじみ出る失望感が見てとれ、実に哀れであった。

「それは僕に女の装いをしろということでしょうか、ドルトン公爵？」

エリーは絞り出すような声で言った。

「女の装いといったってエリー、お前は女の子だろう。女性がドレスを着るには至極当たり前のことだぞ。」

「しかし、女学校ではないのなら、なににも女装をしなくてもよいではないですか。」

「共学といっても男女の校舎は別れている。行き来も簡単には出来ない。私達としてもお前たちを一人にするのはいささか不安がある。それに、妻と話し合って決めたことだ。分かってくれ。」

「お父様、ついに私も中央の社交界にデビューできるということですね？」

隣に立っている妹の不幸もいざ知らず、もう華々しい中央の社交界しか頭がないレティシアは声を弾ませて尋ねた。

「まあ、学校といってもお前達が入るのは最高学年のクラスだから、授業はほとんど宮廷での行儀作法や政治に関することになるだろう。一年間しっかり勉強に励み、そのあとに社交界に出ることになる。ドルトン家に恥じぬ行儀作法を身につけておくれ。」

「最高だわ、お父様。」

レティシアは歓声を上げた。

「お心遣いいたみます。」

エリーは沈んだ声で礼を言った。

▲

首都ペストニアへの出発の朝のドルトン家はひどく慌しいものだった。

マダムドルトンは娘達にトランクの中身を三回確認させなければ気がすまなかったし、料理長のピエールは特製ウスターソースを壺ごと持っていつてくれと言つてきかなかった。

「エリック様の好物ではないですか。ねえ、エリック様。きつとむこうに行ったら、このピートの料理が必ず恋しくなりますよ。」

なるべく荷物を軽くしたいと思っているエリーが丁寧に料理長の申し出を断ると、ピートは目に涙を浮かべながら、もう一押ししてきた。

「ちょっとエリックその匂いつてまさか、ウスターソース？私、あのソースのかかってる料理食べると胸焼け起こすのよ。」

結局、押しに負けて壺を持たされたエリーを見てレティシアは顔を

しかめた。

「それでは、お父様お母様、行つてきます。」

レティシアは、住み慣れた屋敷をもう一度振り返ると、男爵夫妻の頬に交互にキスをした。

「体に気をつけるのよ。二人とも、素敵な淑女になって帰ってきてくれることを期待してるわよ。」

「ええ、もちろん。首都で、立派なお嬢さんも見つけてくるから、期待しててね。」

レティシアは、いつもより念入りに巻いた髪を払いのけると、自信たっぷりに微笑んだ。

「努力します。」

エリーも頭を下げた。

・・淑「女」という言葉が引っかかるけれど。

「エリー。」

マダムドルトンは、レティシアの後ろに立っているエリーをごく小さな声で呼んだ。

エリーが、女性の名を呼ばれるのが嫌いなことは、知っていたが、別れの日まで偽りの名で娘を呼ぶ気は、毛頭なかった。

エリーはこうした家族が集まっている場では、いつも少し後ろに下がって立っている。

それはもう彼女の長年のくせであつた。

マダムドルトンは、そんなエリーを引き寄せると、優しく抱きしめた。

「あなたもレティシアも、わたくしたちの大切な子供ですよ。ここにあなたたちを愛してる両親が待っていることを忘れないで。それでも、エリー。あなたがそれに応えるなんて義務はないんですよ。わたくし達は、あなたを心から愛しているけれど、決して何か見返りを求めている訳ではないのですからね。あなたは、あなたの思うままに生きなさい。」

エリーの端正な顔が、わずかに歪んだ。

「・・・はい。」

言わなくてはいけない言葉がたくさんあるのに、何も言えない。

エリーは、黙ってマダムドルトンのふっくらした胸に頬を寄せた。

第二章：影の都2

ムジカ・マースカレー老男爵はめったなことでは動揺しない男であった。

元々外国からの親善大使としてこの国に駐在していたムジカは年齢的にも祖国への長旅は難しかったため、大使としての任を終えた後もこの国にとどまり、爵位と国のはずれに土地をもらい、ひっそりと暮らしていた。

干からびた土地を与えられ、政治への関与を一切認められていないとはいえ、生涯の友である執事のカリムと二人で食べていけるこの生活にムジカは何の不満も感じていなかった。

彼は自分の人生に満足していたし、自身の人生の幕が下りていくのを感じてもいた。

玄関の呼び鈴が鳴ったとき、二人の老人は初め、それを風の音だと思った。

そう思ってしまうほど、呼び鈴が鳴ったのは久しぶりだった。

少しすると、二度目の呼び鈴が鳴った。

「はて、カリム。今呼び鈴が鳴らなかったか？」

「きつと風の音ですよ。」

「わしも一度目はそう思ったんだが、今鳴った二度目は間違いなく呼び鈴の音だったぞ。」

「誰でしょう？こんな時間に。」

カリムはゆっくり立ち上がると玄関へ歩いていった。

カリムが覗き口を開けて外を覗くと、薄暗がりの中、旅人らしき小柄な男が一人立っていた。

「旅のお方ならお断りしております。宿なら西へ少しいったところに村があります。」

そう言つてカリムが覗き口を閉めようとした。

「冷たいな、カリム。昔はケーキと温かい紅茶を用意して待っていてくれたじゃないか？」

旅人はひどく懐かしい東の国の言葉でそう言い、マントのフードを取った。

「今、なんと？」

カリムは驚き、ランプをかざして男を見た。

いや、男というより少年であった。

姿こそみすばらしいが、フードの下には見覚えのある緑の瞳がいたずらっぽく笑っていた。

「まさか、そのお顔。サマスブル国第二王子アベル・イルマスール様などとおっしゃらないでくださいよ。」

カリムはそう言いながらも、重いかんぬきを上げ、ドアを開けた。

「そのまさかだよ、カリム。まあ、家出したからもう王子じゃないかもしれないけどね。」

ドアがあくやいなや少年は小さな老執事を抱きしめた。

常に冷静沈着のムジカ・マースカレー男爵も、この時ばかりは、腰を抜かさんばかりに驚いた。

当然何も言えずに立ち竦むムジカにアベルは無邪気に抱きついた。

「変わってないな、ムジカ。あなたはいつも期待通りの反応をしてくれる。」

アベルは昔よくしたようにムジカの禿げ上がった頭をツルリと撫でた。

「ア、アベル様。こんな所で会いするとは。いったいサマスブルに何が起きたんです?」

やつのことで口を開いたムジカはかすれた声で尋ねた。

「何も起きてはいないよ。父上は相変わらず聞き分けの悪い堅物だし、兄上は毎日飽きずにチエスばかりやっている。どうせ国は兄上が継ぐのだし、僕は暇だから西方見聞をすることにしたのさ。まあ、黙って出てきたし、いわゆる家出ってやつかな。」

アベルはムジカのぼっこりとでた腹をぽんと叩くと満足げに彼から手を離れた。

「家出ですと？誠実と聡明で名高いイルマスール家からそのようなことをなさる方が現れるとは！大体あなたはいつもそうでしたね、プリンスアベル。夜中に城を抜け出しては、私のところへやってきた。あなたはまだ幼かったからあまりきつくは言わなかったが、こんなことになるとは。あの時にきちんと言い含めるべきでした。お城ではきつと大騒ぎになっていますよ。アベル様がこうなってしまうのも、すべて私の責任。私が責任もってアベル様をサマスブールに帰します。」

最初は驚いたもののいつもの調子を取り戻したムジカはアベルをにらみつけ、はつきりと言った。

「やっぱり、再会を素直に喜んでくれる気はないようだね。それに僕は帰る気はないよ。この国を見てきたけど、ひどいね。特に首都なんか美しいのは城とその周りの貴族街だけ。庶民の城下町を見たことはあるか？ひどいものだ。餓死している者までいた。いったい、どんなやつがどうゆう政治をしたら、ここまで国が荒れるのか見てみたい。」

「ふらふら遊びで旅をしているわけではなさそうで安心しましたよ。確かに今この国は荒れています。しかし、それはあなたには関係ないことだ。あなたは他国の王子であって、王族のひとりとしてサマスブールを守るべき責任を負っています。他の国のことを考えている暇があったら自国へ帰り、国王さまのお力になれるよう勉強なされ。」

あくまでも言い分を変えないムジカに少しむつとしながらアベルは話を続けた。

「父上と同じことを言うのだな、ムジカ。確かに間違っではないが、サマスブールは安定しているんだ。今は父上も健在で、優秀な兄上は賢王になるだろうといわれている。しかし、保守的な考え方と国内だけでの良い政治だけでは揺れ動く世界にはついていけないと思うんだ。保身からは何も生まれない。それにムジカ、親善大使をやっていたあなたならよく分かるはずだろう。あなたたちに明かされる真実は実に少ない。」

「お考えはよく分かりました。ですが・・・。」

「まだ言うの、ムジカ？とにかく僕はまだ旅を続ける。今日あなたを訪ねたのは懐かしい友人の顔が見たかったのとちよつとした頼みがあったからだ。その様子じゃあ聞いてもらえそうにないけど。」

「まったく強情なお方だ。」

ムジカはため息をついた。

「いいでしょう、話だけでも聞きましょう。」

「いや、たいしたことじゃないんだ。ただちよつと僕をこの国の貴族街の内側にいれてほしいんだ。できれば、紹介状かなにか書いてくれるとうれしいんだけど。もちろん僕の身分は明かさずに。」

アベルは立ったままカリムの用意した紅茶とクッキーに手をつけた。

「いやはやまったくあなたという方は。命知らずにもほどがある。」

分かりました。あなたのお望みを叶えましょう。しかし、条件があります。・・王子、お願いですからせめて座ってからお召し上がりください。」

年老いた男爵はアベルの手から紅茶のカップとクッキーを取り上げながらため息をついた。

「と、いうと？」

アベルはしぶしぶマントを脱ぐといすに座った。

「ひとつ、私を供として連れて行くこと。ふたつ、私が危険だと判断したことは絶対に止めていただきます。みつ、貴族街での用が済んだら、御国に帰っていただきます。この三つを守ると約束していただけるのなら、あなたのお望みを叶えましょう。」

ムジカの言葉を聞くと、少年は満足げに笑った。

第二章：影の都3

「結局、エリーは男の子のままね。」

レティシアは目の前に座る美しい少年・・・に見える少女を見て、ため息をついた。

当のエリーはそんなレティシアの視線にも気づかず、馬車の外を流れる風景に見とれている。

エリーは、公爵に頼み込み、旅の間だけは、男のままでいることを許してもらったのだ。

そちらの方が、何かと便利だというのが、エリーの言い分らしい。

「見て、レティシア。今鹿がいたよ。あんな大きな鹿始めてみた。それにあの人達の家を見てごらんよ。テントみたいだ。」

「都に行ったら、きつともっと画期的で珍しいものがたくさんあると思うわ。」

レティシアは大して関心を寄せない。

「そうだ、珍しいといえば、花祭りの晩に会った男の子のこと覚えてる？不思議な子だったわよね。東方のなまりだったし・・・。それに見た？目の色なんて緑色よ。首都に行ったらきつとあんな風な異国の人にもたくさん会えるかしら。」

「僕はやっぱり都は嫌だよ。そりゃあ、確かに異国の人々や文化に

は興味はあるけれど、ピラピラしたドレスを着て、くるくる踊るだなんて考えただけでぞっとする。』

「まったくティーンネイジャーの女の子の台詞とは思えないわね。やっぱりお母様はあなたの育て方を間違えたとは思えないわ。それから分かっていると思うけど、首都に着いたら、その言葉遣いはやめてね。」

「わかっておりますわ、お姉さま。うふふ。」

エリーは、わざと高い声を出すと、手を胸の前で合わせて体をくねくねと左右に揺らした。

「エリー！」

レティシアはこぶしを振り上げたと同時に、馬車が急停止した。

「盗賊です。どうやら囲まれたようです。」

護衛隊長のディックの叫ぶ声が聞こえた。

「僕が外の様子を見てくるから、レティシアはここでじっとしてて。」

エリーは腰の短剣を抜いた。

「ちょっと様子を見るだけよ。エリー。絶対危ないことをしてはダメよ。」

レティシアは何を言っても聞いてはくれなさそうなエリーを見るとため息をついて言った。

エリーは頷くと勢いよく馬車から飛び出した。

外に出たエリーは状況の悪さに愕然とした。

狙っていたとは思えない人数の多さと人為配置。

形勢はあきらかにこちらに不利だ。

しかし、違和感がある。

ただの盗賊が、ここまで出来るのか。

「うああ！」

考え込んでいたエリーははっとして声のほうを見た。

ディックの胸に真紅の液体が飛び散る。

隊長のディックが重傷を負って一線を退いてからのドルトン家の護衛隊の敗北はあつという間に決まった。

味方どんどん倒れていくのを見て、エリーは覚悟を決めた。

馬車のドアを開けるとうずくまっているレティシアに小声で囁いた。

「もう持ちそうにない。レティシア、多分狙いはドルトン夫妻の実子である君だ。だけど、君を連れて行かせる訳にはいかない。僕が身代わりになるから、君はやつらがいなくなるまで待って、近くの

村に助けを求めるんだ。奴らは、僕たちのことをよく調べてきたよ
うだ。君は侍女を使うのが嫌いだから、女性が君一人なのも知って
いるだろう。」

「何を言ってるの、エリー！そんなの絶対だめよ。あなたを危険に
さらすなんて出来ない。それに本人じゃないって分かったら、殺さ
れてしまうかもしれないわ。」

レティシアは血相を変えて叫んだ。

「大丈夫だよ、レティシア。僕の強さは、君が一番よく知っている
だろう。それに、こんなにあっさり護衛隊が、負けるなんてちょっ
とおかしいと思わないかい？多分、黒幕に大物が、いるはずだよ。
ちよっと思つて、そいつの顔を拝んだら、すぐ逃げるから。レティ
シアは、先に首都まで行つて待つていて。」

エリーの瞳は、ちよっと思つていた少年のように輝いて
いた。

結局エリーにとっては、盗賊に捕まることも人生に冒険というスリ
ルを付け足すだけなのだろう。

本当にこれで、わたしを守っているつもりなのかしら。

レティシアは、ため息をついた。

「絶対無理はしてはだめよ。十日後までに首都に来なかったら、父
様に言いつけてやるから。」

「約束するよ。それから、レティシア。様子を見て、馬車から離れ

て。火をつけられるかもしれないからね。」

かつらを脱いで、少女の姿になったエリーは、真っ白な頬が高ぶった気持ちのせいか、赤く染まっている。

自信あふれる「少女」の美しさにレティシアは息を呑んだ。

エリーは短剣をハンカチに包み、ブーツの中に隠すともう一度レティシアの顔を見て言った。

「大丈夫よ、レティシア。また、会いましょう。」

「当たり前よ。一日遅れることに利子は増えてくんだからね。」

エリーは、優しく笑うと、勢いよく馬車の扉を開けて出て行った。

「やめなさい。」

戦場と化した森の中に高く、澄んだ声が響き渡った。

金色の長い髪が風に揺られ、少女の背中に薄いベールを張っている。

一瞬、その場にいただれもが馬車から降り立った少女に美しさに見とれた。

もつとも、我に返った衛兵たちは少女がレティシアでないのを見て取ると、安堵と困惑が入り混じった顔をしたが。

レティシアは息を吸うと続けた。

「わたくしの名はレティシア・ドルトン。あなたたちの目的はわたくしだけでしょう？ 剣をしまいなさい。抵抗などしないわ。」

「お嬢様は物分りがいいじゃないか。」

どうやら盗賊の頭であるに見える男が、にやりと笑った。

「ええ。わたくしにも、あなた方が物分りが悪そうには見えないわ。そこで、お願いがありますの。この者たちだけは放してやっていただけにかしら？」

「そいつはどうか？ あんたを手に入れてた俺たちが油断した隙に後ろからおそってくるかもしれない。」

男は顔は笑ってはいるが、隙のない眼でエリーを見つめた。

「その心配はないわ。命令です。護衛兵は皆剣を彼らに渡しなさい。どうせ、父への報告者は一人残しておくつもりだったんでしょ？ 少しくらい、増えてもいいじゃない。彼らはほとんど怪我を負ってるし、抵抗や追跡をする体力が残っている者もないと思うわ。心配だったら、縄で縛っておけばいいわ。」

後で、レティシアが、縄を解けばいい。

「お嬢様がそこまでおっしゃるなら。おい、そいつらの腕と足をしばれ。」

男はエリーの目に偽りが無いのを見て取ると、仲間たちにどなった。

「ありがとう。ディック、いいこと。わたくしを追ってきてはだめよ。あなたたちはとにかく安全なところで傷の手当をしなさい。」

盗賊たちに聞こえるように大きな声で言うと、エリーは念を押すようにディックの目に合図した。

突然現れた美しい少女が誰かなのか、やっと理解した若き護衛隊長は心得ましたとばかりに力強くうなずいた。

第二章：影の都 4

生い茂っていた木々が開け、強い日差しがエリーの顔にかかった。

盗賊たちに追い立てられながら、三十分程歩いた頃だろうか。

エリーたちは森がぼっかりと開けた空き地に出た。

日の光に目が慣れたころ、エリーの目に大きな石造りの屋敷が飛び込んできた。

苔むした石のせいで屋敷全体は緑がかってみえる。

「こつちだ。早く歩け。」

エリーは男たちに押されて屋敷の中に入っていった

▲

「ようこそわが屋敷へ、レティシア・ドルトン嬢。ズボンにブーツとは、うわさと違ってなかなか凛々しいお姿だ。」

屋敷の一番奥の部屋に通されたエリーは背の高い男と向き合っていた。

二人は部屋の隅で小さな机をはさんで、座っている。

窓にはカーテンが引かれ、部屋の真ん中にある大きなテーブルの上には一本のローソクが置かれているだけだった。

「あなたは？」

暗がりの中、目の前に立っている男の顔をよく見ようとして、エリーは目を細めた。

「私ですか？名乗るほどのものではないですよ。そうですね・・・あえていうなら、夜の森と呼んでください。」

男はカップを口元に運びながら言った。

「人を誘拐しておきながら、ずいぶん、ふざけたお名前ね。まあ、いいです。わたくしはまどろっこしいのが苦手ですので単刀直入に伺いますけど、狙いはいったいなんですか？この屋敷や家来の数から考えてもお金に困っているようではないし・・・。」

やっぱり、暗くてよく見えない。

声からして30〜40代ってとこかな。

洋服はベストにズボンで、特に特徴のある装飾はなし・・・。

エリーは容姿を見るのをあきらめ、声を記憶することに専念することにした。

「さすが、ドルトン家のご令嬢だ。この状況でも、しっかりとした観察力をお持ちだ。しかし、あなたがそれを知る必要はない。」

男の手が暗闇の中ゆっくりと動いた。

エリーがはっとして立ち上がろうとした瞬間、エリーの額に硬いものが押し当てられた。

「命が惜しくば、この紙に君の手でサインを書きたまえ。」

男は空いているほうの手で机の上にある一枚の紙を指差した。

「内容は……って聞いても答えてくれるわけないわよね。いいでしょう、サインするわ。でも、手元が暗いからろうそくで照らしてくれないかしら？」

エリーは手探りで机の上にあった羽ペンを取った。

「いいでしょう。」

男は銃を持ったまま立ち上がると、中央のテーブルの上から燭台を持ってきた。

暗闇にぼんやりと男の顔が、浮かび上がった。

声の感じより大分年がいており、もう初老といってもよい位であった。

一見粗野にも見えるが、よく見れば姿勢や仕草にどこか気品があるところが、男が貴族であること示していた。

焼けた肌に鋭い眼光が光り、エリーを見つめる様は、まさに鷲が獲物を狙う時のそれであつた。

あまり、見つめていても怪しまれるので、エリーは、横目でさっとそれらを観察すると、羽ペンをもつた。

「サインしたわ。」

男は、エリーのサインを確認すると頷いた。

「では、あなたのことは、人質として預からせていただく。おい、ベン。レティシア嬢をご案内しろ。」

ドアが開くと、背に低い青年が入ってきた。

「ちょっと、失礼します。」

エリーの後ろに立った青年は、エリーの手首を持っていた縄で縛つた。

「無礼を申し訳ない。しかし、逃げられると厄介ですからね。」

青年がそう言った瞬間、エリーの意識は、闇にのまれた。



顔に当たる日差しが、まぶしくてエリーは、目を覚ました。

ひどい頭痛がする。

頭を強く殴られて、気絶してしまったらしい。

エリーは小さな部屋の中にいた。

出口は、ドアがあるだけで、小さな天窓から日差しが差し込んでいる。

「あら、起きたのね？」

突然背後から声がしたので、エリーは驚いて振り返ると、部屋の隅の椅子に若い女性が座っていた。

「もう全然起きないから心配しちゃったわ。ベンったら、手加減ないんだから。まったく何度いっても直らないのよね。」

呆然としているエリーを無視して女性は、話し続けた。

大きな瞳は深い青色で、明るい亜麻色の髪を一本のみつまみに編んで垂して、よく糊のきいた白いシャツのモスグリーンのスカートの下で足を組んでいる。

シンプルだが、高そうな生地洋服は、女性が、けして身分の低い者ではないことを示していた。

「あの・・・あなたは？」

やつと思いで口を開いたエリーが、ぎこちなく尋ねた。

「あら、やだ。ごめんなさい。わたしは、ハンナ。「夜の森」からあなたの世話をまかされてるの。」

ハンナと名乗る女性は、優しく微笑んだ。

およそこの場に似つかわしくない人の良い笑顔からハンナの人の良さが、見て取れた。

「夜の森・・・」

エリーは声を硬くした。

男の鋭い眼差しを思い出したのだ。

エリーの様子を見ていたハンナは、ため息をついた。

「わたくにこんなこと言う資格はないと思うけど、ごめんなさい。

「夜の森」は、決して悪い男ではないわ。辛抱してね。あなたのお父様が、こちらの要求に応じてくれさえすれば、あなたを傷つけず、家に帰すから。」

どこか悲しそうで、しかし真摯に語りかけてくるハンナを見て、エリーは、ハンナが「夜の森」にとって家族があるいはとても親しい間柄であることを察した。

「夜の森はいつたい何をしようとしているのですか？」

エリーは、正直に尋ねた。

ハンナのような人の場合、こちら素直になった方が、情報を聞き出しやすい。

「教えることは出来ないわ。ただ、これだけは言える。『夜の森』は、誰よりも国民のことを思っているわ。」

迷いのない青い瞳で真っ直ぐエリーを見つめて言い切ったハンナを、エリーは美しい人だと思った。

こんな場所で出会わなければ、間違いなく好きになっていただろう。

それにしても、「国民」とは・・・。

あらかた、今の国王に反感を抱く革命グループの類といったところか。

ハンナには悪いが、ここで重大な情報を得れば、ドルトン家に大きな利益をもたらす。

エリーは、普段なら絶対見せないであろう少女らしい笑顔を浮かべた。

「ハンナさんが、そう言うなら信じます。わたくしの為なら、父様は、どんな要求だって呑んでくれるだろうし・・・安心したら、喉が渴いてしまいましたわ。何か飲み物を頂けないでしょうか？」

「ええ、もちろんよ。さあ、どうぞ。」

エリーの笑顔を見て、胸をなでおろしたハンナは、そばに置いてあった水差しからコップに水を注ぐと、エリーに手渡した。

「ありがとうございます。．．時にハンナさん。あなたは、今の王の振る舞いをどうお考えですか？」

白く長い指でガラスのコップの縁をなぞると、エリーは囁くように尋ねた。

「え？」

「いえ、わたくしは常々、現国王の民衆を省みない非道な政治に疑問を持っていたのですが（わたくしが、こんなことを言っていたことは秘密ですよ。）、お父様や他の貴族の手前、誰にもこの心を明かすことが出来なかった。でも、わたくしのこの気持ち、あなたなら分かっていただけのような気がいたしますの。」

エリーは、その白く整った顔にできる限り憂いを帯びた表情を浮かべると、悲しそうにハンナを見上げた。

「．．あなた。」

ハンナは、そこで一旦言葉を切ると、探るような瞳でエリーを見つめた。

エリーはそんなハンナの視線を穏やかに受け止めると、微笑んだ。

ここは、勝負どころ。絶対にこの女性の信頼を得てみせる。

「突然、変なことを言う女だと思っていらつしやるのでしょうか？　ごめんなさい。けれど、わたくし、誰かにこの思いの丈を聞いていたきたくて・・・お恥ずかしい話だけれど、家に帰れば、もうこんなこと話せる人がいませんの。世間知らずな女の気まぐれな戯言を思つて頂いても結構ですから、ただわたくしの話を聞いていただけないかしら？」

そこまで言つてエリーは、唇を強く噛むと、目頭に手を当てた。

やけに長い沈黙が続いた。

天窓から差し込む光は、いつのまにかオレンジ色に変わっていて、エリーの白い頬を優しく照らした。

「あなたは、」

「え？」

やっと口を開いたハンナにエリーが、顔を上げた。

「あなたが、ここに來たのは運命なのかもしれないわね。」

ハンナは、少し寂しそうに呟いた。

もう一押しだ。

そう思つたエリーが、口を開きかけた時だった。

足音と共に低い話し声が、聞こえてきた。

ハナは、自分の犯しかけた失態に気づいたのかはっとした顔をすると黙って俯いてしまった。

エリーの心の中の舌打ちと同時にドアが、開かれた。

第二章：影の都5

「ごくろうだったな、ハンナ。」

部屋に入ってきた背の高い男が、ハンナに声をかけた。

30代半ばといったところで、整った顔立ちをしているが、それが逆に冷たい印象を受ける男であった。

特徴は、緑がかった黒い髪で、エリーは、初めてみるものだった。

威圧的な雰囲気からハンナのように何かを聞きだすのは、無理だろうとエリーは、考えた。

「交代だよ。」

続いて入ってきた男は、20代前半くらいで、軽々しいそぶりが、鼻についた。

金髪碧眼でこれといって特徴はないが、どこぞの貴族の放蕩息子という風情であった。

「え、ええ。ありがとう。」

先程の動揺を隠しきれないハンナは、慌てたように出て行った。もう少しで聞き出せそうだったのと思いながら、恨めしげに閉まるドアを眺めていると、肩を掴まれた。

「おい、ハンナに何か言ったのか？」

振り向くと、目の前で黒髪の男が、エリーを睨んでいた。

「いいえ。ただ、少しわたくしの話を聞いていただいただけです。」

今、白を切ったところで、どうせ後でハンナから伝わるだろうと考えたエリーは、正直に答えた。

「何の？」

「・・・現国王に対する不満とかかしら。」

エリーの言葉に二人の男の眉が、ピクリと動いた。

「俺達に対する嫌味か？」

黒髪の男は、無骨に怒りを露にした。

「嫌味のつもりはありません。ハンナさんは、優しかったですし。」

「賢明な判断だな。」

黒髪の男は、幾分落ち着いたようで椅子に腰を下ろした。

「・・・それで、わたくしは、何をいたしましょう？」

「父上である公爵に資金を提供していただきたい。」

「身代金でしょう。」

「・・・そう受け取っていただいてもかまわない。」

黒髪の男は、弁明もせず、頷いた。

「私の命は、幾らなのかしら？」

「一千ハルト。」

公爵家といえども法外な金額にエリーは、わずかに眉をひそめた。

「何に使うかお聞きしてもいいかしら？」

「国民のために使う。」

「傲慢な考え方ですこと。」

エリーの言葉は、男達を大いに逆撫でしたようで二人は、不快感を露にした。

「ご令嬢には、分からぬ話だ。」

黒髪の男は、怒りを飲み込むように低い声で言った。

「ええ、分かりませんわ。けれど、年若い娘を血を流してまで強引に連れてくるような方達が、国民がを救えるとも思わないわ。」

きつと、レティシアだったら、こう言うのだろうな。

エリーは、竹を割ったような性格の姉を思い浮かべた。

「ふっ。」

黙って後ろに立っていた金髪の男が、突然吹き出した。

「カロン。」

黒髪の男も怪訝そうに振り向くと、吹き出した男をたしなめた。

「いや、ごめん。なかなか、率直な意見だったからさ。君、面白い子だね。」

カロンと呼ばれた男は、座り込んでいるエリーの前に跪いた。

「僕は、カロン。ああ、これは、偽名だからね。あっちの怖い男は、ヒューリツヒ。いい名前だろう？ ハンナが、考えたんだよ。」

「ええ。私の名前は、おばあ様が、つけてくださったのよ。いい名でしょう？」

エリーもカロンの調子に合わせた。

後ろでは、そんな二人をヒューリツヒが、イライラしたように見つめている。

眉間に皺を寄せて、口をへの字に結んでいる様子は、たしかに怖い。

「いい名だ、レティシア嬢。君は、今の国王について、どう思っているんだい？」

「カロン！」

ヒューリツヒの苛立たしげな声が、響いた。

「ちよつとぐらい、いいじゃないか。彼女は、次期公爵だよ。見解を聞いてみたいじゃないか。」

カロンは、ちよつと楽しそうに言った。

「愚かな王だというのが、この国に住む人々の大方の見解じゃないかしら。国政を牛耳る貴族から道に転がる乞食まで、皆同じことを言うでしょうね。」

「で、君の意見は？」

「やっぱり愚かな王かしらね。でも興味ないわ。私が、守るべきものは、公爵家のと領民だけだもの。」

「さすがは、マダムドルトンのお嬢さんだ。お母上に似て、聡明なようだね。」

カロンは、にっこりと笑った。

「わたくしも質問していいかしら？」

「どうぞ。」

「あなたは、この国を変えることが出来ると本当に思っているの？」

「そう信じたいね。」

エリーの挑戦的な言葉にもカロンは、笑みを崩さなかった。

「もういいだろう。きりが無い。ヨハンに代わらせるぞ。」

終いだというようにヒューリッヒが、言った。

「レディーに失礼だよ。」

カロンのそう言ったが、もう気が済んだのか、手に持っていたバスケットをエリーのそばに置いた。

「じゃあ、また様子を見に来るよ。大した物じゃないけれど、お腹が空いてるだろうから、置いていくね。」

▲

二人と入れ替わりに入ってきた男は、柄が悪く見るからに頭の悪そうな男だった。

はつきりとは、覚えていないが、多分奇襲に参加していた一人だろう。

姉によく言われたことだが、何かと疎いエリーは、男の絡みつくような視線が、何なのかよく分からなかったが、居心地の悪さを感じ

ていた。

長居は、無用だなとエリーは思った。

男に促されて、開けたバケットの中にフォークを見つけた時、エリーに迷いはなかった。

ハンナの時は、相手が女性だったこともあり、何となく躊躇われて、機を逃してしまっただが、目の前の男に遠慮する気はなかった。

胸元に男が伸ばしてきた手を思いつき突き刺した後は、あっという間であつた。

怯んだ男の後ろに回り、首もとのつばを突くだけで男は、がつくりとその場に倒れた。

エリーとレティシアが、幼い頃に東方からやってきた医者に教えてくれたもので、医者以外の男が体に触ろうとした時だけ、使つていいと言われた。

ませていたレティシアは、すぐに理解したようだが、エリーは、意味がよく分からなかった。

もちろん、便利な技には、違いがないのできっちり覚えたが。

伸びている男を見ると、確かに医者に感謝する思いである。

男の上着のポケットに鍵を見つけたエリーは、ドアの外に人の気配がないのを確かめると、廊下に出た。

もつと探っておきたいところだけど・・・。

エリーは、唇に手を当てた。

先程におつかない男とキザ男に会っても厄介である。

決心したエリーは、廊下に置いてあった箱を掴むと、近くの窓に叩きつけた。

レティシアがいたら、怒るだろうな。

窓から飛び降りながら、エリーは、やたらに物を壊すのを嫌う姉の怒った顔を思い浮かべた。

第二章：影の都 6

「全く、夜の森ってやつは、気が滅入っちゃうよ。」

シモンは、独り言を言つと、こみ上げてきた寂しさを紛らわすために相棒のマンドリンを鳴らしてみた。

リズムをとるために体を揺らすたびに下に敷き詰められた干し草が、ガサガサと音を立てるものだから、どうも調子が狂ってしまう。

シモンは、ため息をつくと、マンドリンを置き、干し草の上に寝転んだ。

静かな森も干し草のベットも狭い馬小屋も馬の鼻息や体臭もこんな風に馬屋番をしている自分も何もかもが、野暮ったい。

「一体、いつまでこんな生活送りやあいんだい？」

誰が返事をしてくれるわけでもないのにシモンは、一人ぼやいてみた。

シモン・ベリックを知っている者は皆、口を揃えて彼をキリギリスのように怠け者であると言った。

事実、シモンは、普通の若者達が夢見るように軍隊に志願して功績を挙げることに興味はなかったし、ましてや家業の鍛冶屋を継ぐ気など毛頭なかった。

万年五月病という言い方でさえまだましの二十歳になった今も、ブラブラと遊びまわっている始末であった。

そのシモンが、なぜ馬屋番なんかしているのか。

もちろん、彼が、望んで仕事をしているわけではない。

吟遊詩人の真似事をしながら、町の酒屋を回っていたのだが、不景気のせいか最近めつきり見物料が、入らなくなってしまった。

仕方がないので、鍛冶屋をしている父親に金の無心をしていたのだが、その父親にも愛想を尽かされて勘当された拳句、飲み代のツケも溜まってしまい、とうとう借金の形に相棒のマンドリンを取られそうになった。

これは困ったと重い腰を上げて、仕事を探したところ、森の中にあるお屋敷の馬屋番の仕事がなかなかいい報酬になると聞きつけ、今に至る。

さて、シモンが、うとうとし始めた頃にふいに静寂が破られた。

遠くで何かが割れる音がしたかと思うと、重々しく静まり返っていた屋敷の雰囲気が一瞬に騒がしくなった。

それでも、シモンは、自分には関係ないだろうと思い、のんびりと横になっていた。

そんなわけで、ひどく息を切らした少年が、馬屋に飛び込んできた時も初めは、気が付かなかった。

馬の嘶きに横目をやった時、ようやくくせ者の存在に気が付いた。

「ちよつと、まったあ！」

シモンは、手近の馬に乗ろうとしている少年の首根っこを掴んだ。

「ちよつと、あんた何者だい？屋敷の人には、あんたみたいな子供はいなかったよ。」

シモンは、少年を掴んだまま、自分のそばに引き寄せた。

ふいを突かれた少年は、一瞬驚いたものの、すぐに体を浮かせて、シモンの腹に蹴りを入れた。

痛みに耐え切れず、シモンが、手を離すと、少年は、躊躇せず身軽に馬に飛び乗った。

もしも、シモンの腕が、人よりずっと長くなければ、エリーは、そのまま逃げ遂せることができただろう。

しかし、シモンの腕は、ひよろりと長かったし、彼も多額の報酬のために必死であったので、寸前のところでエリーの細い足首を掴んだ。

これには、さすがのエリーもギョツとした。

足首にマンドリンを片手に持ったクシャクシャ頭の奇妙な男がぶら下がっているのである。

なんとか振り落とそうとしたけれど、シモンは、なんとしても離す

まいと必死にしがみついていたまま、泣き落としを始めた。

「ちよっと、待ってくれよ。ここで、お前に逃げられたら、俺は、相棒と離れ離れになっちまうんだぜ。」

「そんなの知らないよ。僕には、関係ない。おい、離せ。」

二人の言い争う声を聞きつけて、見張りの男達が、走ってくるのを見たエリーは、いよいよ焦り、シモンを蹴飛ばそうとした。

「どうしてもっていうなら、俺も乗せてけ！」

突然、シモンが叫んだ。

驚いたエリーが、下を向くよりも早くシモンは、弾みをつけてエリーの後ろに飛び乗った。

「伏せろ！」

呆然としているエリーは、シモンに押しつぶされた。

途端、弓なりの音がしたかと思うと、耳元でビュッと鈍い音がした。

いつの間にか手綱は、シモンの手に渡っており、抗議する間もなく、エリー達を乗せた馬は、屋敷を飛び出していった。

▲

シモンは、木々の生い茂る森を無我夢中で駆けていた。

手綱をきつく握り締め前ばかり向いていたものだから、押しつぶしていたはずのエリーの姿がなくなっていたのにも気が付かなかった。

小一時間走りようやく森がひらけて、小川のほとりに出たので、シモンは、安堵のため息をついて馬を止めた。

下にいるはずの少年に声をかけようとした時であった。

シモンは、首元に何か当たっているのに気が付いた。

恐る恐る下を見ると、喉元にきらめく刃物が当てられている。

「馬から降りろ。」

背後から押し殺したような声がした。

「オーケー。オーケー。ちょい、たんま。穩便に行こうよ。押しつぶしてたことは、謝るからさ。」

二十年間お気楽人生を送ってきたシモンは、人に刃物を突きつけられるなんて初めてであった。

「どうでもいいから、降りろ。」

エリーは、苛立ちを隠さず吐き捨てるように言った。

「そんなこと言わないでくれよ。俺は、もうどこにも行く所がないんだから。あんたは、俺が、あのおっかない奴らに殺されてもいいのかよ?」

懇願の言葉にもエリーは、眉一つ動かさず、代わりにナイフを持つ手に力を入れた。

「いいも悪いも、僕には関係ない。」

エリーは、シモンの背中を押すと、地面に叩きつけた。

シモンは、小さく呻いた。

「こんな所に置き去りにされたら、夜の森に殺されちまうよ。俺は、夜の森が大嫌えなんだ。」

泣きそうな声で呟いた時、ふいに馬上の少年が、シモンの方を見た。

「お前、「夜の森」を知っているのか?」

「知ってるもなにもやつこさん。ここ一カ月、毎日、一対一で睨めっこしてる仲だよ。」

シモンの返事は、どうやら少年の心を動かしたらしかった。

しばらく沈黙があった後、エリーは、一人納得したように頷いた。

「よし。いいだろう。乗れ。」

シモンは、パツと顔を輝かせると、いそいそと馬に乗った。

真夜中の月は、高く昇っていた。

今となれば、シモンは、夜の森なんざ怖くなかった。

朝が来るまでも二人の会話に大きな語弊が生まれていたことに気がつくまでも、まだ時間があつた。

しかし、それは、シモンの罪ではないことを大きな月だけが知っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9815d/>

忘れな草の王冠

2010年10月10日06時01分発行